

論文

シカゴにおける移民女性の英語力が近隣生活における エンパワメントに及ぼす影響に関する研究

仁 科 伸 子

要 約

本研究の目的は、アメリカにおいて移民として暮らすヒスパニック系女性の英語力が近隣生活とエンパワメントに及ぼす影響について実証的に明らかにすることを目的としている。アンケート調査の結果を統計的に分析し、本研究により、明らかになった点は以下の通りである。

移民の向上には、雇用は重要な要素であるが、英語力が高いほうが安定した雇用につくことができている。逆に、英語力が低い場合は、英語力が高い場合と比較して、短期雇用や不安定就労の状態が増加する。

ヒスパニック系移民女性の生活満足度と英語力の関係では、生活全体に関する満足度、仕事に関する満足度、経済生活面での満足度と英語能力の関係性が認められたが、他の項目では有意な関係性がなかった。

エンパワメント指標17項目を因子分析によって4つの因子、社会サービスへのアクセシビリティを示す「アクセシビリティ因子」、借入れや、貯蓄の有無などを示す「経済性因子」、教会やコミュニティへの参加を示す「社会活動因子」、信頼できる友人や、友人の有無からなる「社会関係性因子」に分解した。「社会関係性」と英語力との関係は有意ではなかった。最も有意差が現れたのは、「経済的因子」であり、このことは、この研究の中で一貫している。

つまり、仕事に就く、安定的に雇用される、経済的に安定した生活を送るという移民の女性の生活における経済的な基盤は、英語力によって、関連付けられている。

多くの要素は、「流暢な」英語力と関連しており、「流暢な」英語の習得のためには、長期の居住期間すなわち、アメリカに子どものころから暮らしていることが必要であり、多くの第一世代の移民が経済面での安定を得ることが難しいことと整合している。

また、移民女性が経済的に安定した生活を獲得するためには、英語力の習得は大きなステップになると考えられる。

1. 本研究の背景と目的

アメリカは移民国家である。2016年の合衆国国勢調査によると、ヒスパニック系またはラテン系の移民は、17.8%となってアフリカ系アメリカ人の13.3%を上回った（United State Census Bureau 2016）。ヒスパニック系、ラテン系といわれる人々はその出身地によって、メキシコ系、プエルトリコ系、キューバ系、中央・南アメリカ系などであるが、スペイン語を話す移民であることが共通している。1965年の移民法改正により、メキシコ系移民が急増したこと、及び中南米諸国の政変による移民が増加したこと等が要因である。統計的にヒスパニック系アメリカ人というとプエルトリコ系移民を含んでいるが、法的には1917年ジョーンズ法以降は市民権を有しているため移民にはカテゴライズされていない。

移民の居住は、一定の地域に集中している。ヒスパニック系移民は、主には、カリフォルニア州、テキサス州、アリゾナ州に集中しているが、イリノイ州にも暮らしている。農業が盛んなカリフォルニア州などでは、労働力として非都市地域にも居住しているが、多くは、仕事を得るために都市に暮らしている。イリノイ州では、全米第3の都市であるシカゴには778,000人、28.9%のヒスパニック系移民が暮らしている（U.S. Census Bureau, 2010 Census, 2010）。中でも、最も多いのは、メキシコ系移民で21.4%を占めている。次いでプエルトリコ系、キューバ系が続く。これらのヒスパニック系人口は、シカゴの北部から、北西部に暮らしており、ヒスパニックコミュニティの中では、英語を使わなくても生活できることから、移民してから相当

長い期間アメリカに暮らしている移民やアメリカで生まれていてもアメリカの母国語である英語を習得していないこともある。

移民がその暮らす国に統合されていくためには、言語の習得や教育が必要不可欠であると考えられるが、アメリカはmulticulturalism(多文化多元主義)、つまり、多民族国家で移民にいきなり主流社会への参入を要求するのではなく各民族集団の母語と母体文化を保持しつつ徐々に社会主流化をはかる方法をとっている。(有賀, 1995)。しかしながら、英語が自由に使えないことによる教育上、職業上のハンディは大きく、シカゴにおける2015年の統計を見ると非ヒスパニック系白人の高校卒業者の割合が9割、アフリカ系アメリカ人では8割を超えているのに対して、ヒスパニック系では6割に過ぎないという結果をもたらしている (U.S. Census Bureau, 2011-2015 American Community Survey 5-Year Estimates 2015)。

このような背景の下、本研究では、シカゴ市の北部に位置するローガンスクエア・コミュニティ・エリアにおいて学校ボランティアに参加する女性における英語能力とその近隣地域における生活の関係性について明らかにする。

本研究の目的は、アンケート調査の結果を統計的に分析し、アメリカにおいて移民として暮らすヒスパニック系女性の英語力がその生活とエンパワメントに及ぼす影響について実証的に明らかにすることを目的としている。

2. 先行研究

移民の英語能力を取り上げた研究では、Kristin Turney & Grace Kao により言語バリアのために移民の親が子どもの学校との関係を築くことの難しさについての研究(Turney&Kao, 2009)、Haya Stier and Marta Tienda は、ヒスパニック系移民女性の就業と家計の貢献度について研究しているが、言語との関係性については言及していない (Stier & Tienda, 1992)。

合衆国統計調査を元に Pew Hispanic center が取りまとめた「アメリカに住むヒスパニック系の女性」によるとアメリカに暮らすヒスパニック女性においては、次のような特徴が挙げられている (Gonzales , 2008)。(以下

引用)

アメリカに暮らすヒスパニック系女性の約半分は、アメリカ生まれである。その半分は、両親もアメリカに生まれている。しかし、残りの半分は、他の国に生まれてアメリカにやってきている。また、ヒスパニック系女性の年齢の中央値は、他の人種の女性に比べて若い。

言語については、約55%のヒスパニック系移民女性が自宅では英語のみを話しており、その英語能力はかなり高いものであるとしている。これらの英語を話せる女性のほとんどがアメリカで生まれている。移民としてやってきた女性の73%は英語を話さず、家庭では英語以外の言葉話している。

ヒスパニック系女性は出生率が高く、1年間に1,000人のうち84人が出産するのに対して、非ヒスパニック系女性では64人とどまっている。これらの出産したヒスパニック系女性のうち約42%が未婚である。他方、非ヒスパニック系女性の未婚での出産は34%にとどまる。

教育歴を見ると、ヒスパニック系女性では36%が高校卒業以下の学歴であるのに対して、非ヒスパニック系では、10%以下である。

就業している女性の割合は、非ヒスパニック系とヒスパニック系では同等の値は61%と59%でほぼ同等であるが、アメリカに生まれたヒスパニック系女性は64%が職についている。

フルタイムで働く女性の1週間の賃金を比較すると、ヒスパニック系女性の賃金の中央値は460ドルに過ぎないが、非ヒスパニック系女性では、615ドルである。アメリカに生まれたヒスパニック系女性の賃金が450ドルであるのに対して、移民してきた女性では400ドルにとどまる。また、ヒスパニック系女性は、貧困線以下に陥る割合が20%、非ヒスパニック系では11%となっており、約2倍の差がある。働いているヒスパニック系女性の一般的な地位は、事務員か、ジム補助である。ヒスパニック系女性は、非ヒスパニック系女性よりもブルーカラーとして就業する割合が高い。

(引用終わり)

このように、アメリカにおいてヒスパニック系女性のおかれている立場は、非ヒスパニック系女性に比べて不利なものである。アメリカ合衆国で生

まれていない移民の女性たちは更に不利な立場におかれていることがこの分析から明らかになっている。

このような研究結果を踏まえて、英語能力が生活に及ぼす影響を統計的に明らかにしていく。

3. 研究方法

本論は、研究の一部として実施したアンケート調査を元に分析するものである。アンケート調査の詳細は以下の通りである。

調査期間：2015年8月1日～8月20日

2016年4月1日～4月30日

アンケートは、英語及びスペイン語の2種類を作成し、対応する言語に応じて配布した。

配布方法は、地域のコミュニティ・オーガニゼーションの協力により、各小学校においてボランティアを行っているコーディネーターを通じてその地域に暮らす、あるいは、各小学校に関わるボランティア経験者に対して、アンケート票を配布、留め置きして自記入後回収した。配布数は300票、この結果、255票が回収された。記入量の極端に少ないものは、不適当な言語のアンケート用紙が渡されたか、あるいは回答困難と考えて無効とし、この結果有効回答数は242票であった。統計処理において統計上欠損値があるものについては除外し、回答ごとに有効回答数を算出している。

なお、本研究の研究倫理については、2015年7月熊本学園大学研究活動適正化委員会における倫理審査を通過し、倫理上の問題のない研究かつ、研究方法であることを承認されている。

4. 研究結果

4.1 研究対象について

本研究における対象やグループは、20～50代のヒスパニック系移民を中心とした女性である。年齢 平均年齢37.9歳となっている。年代別では、

30代が最も多く44.3%、次いで40代が32.3%を占めている。アメリカ合衆国における居住年数は、20年以上居住しているとする層（20年以上29年未満と30年以上を合わせた割合）

が、半分以上となっており、居住年数は長期である（仁科 2017）。

表1 英語力 (n=242)

	件数	割合	
流暢 Fluent	54	22.3%	57.4%
とてもよい Very Good	24	9.9%	
よい Good	61	25.2%	
あまり話せない Not Good	72	29.8%	42.6%
全く話せない None	31	12.8%	
合計 Total	242	100%	

4.2 英語力の結果

対象グループの英語力の結果は、表1のとおり5段階に分かれているが、客観的なテストなどによるものではなく、回答者の主観的な判断に基づくものである。「流暢」と回答したものは約22.3%、「流暢」、「とてもよい」、「よい」をあわせると、約57.4%となり、半数以上が英語を話せる。アメリカ合衆国における居住年数は、20年以上居住しているとする層（20年以上29年未満と30年以上を合わせた割合）が、半分以上となっており、居住年数は長期である（仁科 2017）。長期に暮らしていても、英語の能力が高いとは限らず、先にあげたアメリカ国勢調査の結果、半数が家庭内でも英語を話しているとされており、大差はないと言える。「よい」「とてもよい」「流暢」の3つのカテゴリーの中では、「とてもよい (very good)」の層が薄く、全体の中でも10%を下回っている。つまり、英語を話すことができる移民の中で英語能力に開きがあると解釈できる。

10代から60代までの各年代別に英語力との関係性をピアソンのカイ二乗分析によってみると、有意確率は、 $P < .001$ で0.1%水準であった。また、アメリカにおける居住年数は1年から60年までに分布している。居住年数を8

つのランクにビン分割したうえで英語力との関係性をピアソンのカイ二乗分析によって見てみると、こちらでも $P=.0000$ となり、0.1%水準で有意差が見られた。

まず、年代ごとの英語力を見ると、40代、50代の「not good(あまり話せない)」の割合が高いことがわかる。20代、30代は、流暢 (Fluent)、大変よい (very good)、よい (good) をあわせた割合が50%を超えている。居住年数が長くなるほど流暢 (Fluent) の割合は高くなり、居住期間が短いほど英語力は低いことがわかる。長期にわたって暮らしていても全く英語が話せない (none) やあまり話せない (Not good) も存在し、社会関係性など他の要素との関係性を示唆している。

表2 年代と英語力の関係性 (n=242)

	年代					
	10代	20代	30代	40代	50代	60代
英語力 Fluent	0%	35%	26%	12%	24%	67%
Very Good	100%	18%	9%	9%	6%	0%
Good	0%	18%	25%	34%	12%	0%
Not Good	0%	21%	28%	32%	59%	0%
None	0%	9%	13%	13%	0%	33%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

$P<.001$

表3 アメリカでの居住年数別英語力

	アメリカ居住年数(ビン分割済み)							
	短期				長期			
	1	2	3	4	5	6	7	8
英語力 Fluent	3.2%	3.4%	15.2%	17.9%	11.1%	14.7%	63.0%	55.6%
Very Good	6.5%	3.4%	3.0%	12.8%	5.6%	8.8%	18.5%	22.2%
Good	22.6%	20.7%	30.3%	30.8%	38.9%	35.3%	7.4%	11.1%
Not Good	45.2%	51.7%	30.3%	30.8%	38.9%	29.4%	11.1%	3.7%
None	22.6%	20.7%	21.2%	7.7%	5.6%	11.8%	0.0%	7.4%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

$P<.001$

4.3 現在の雇用形態との関連性

表4 現在の雇用形態と英語力

	雇用形態			合計
	Permanent	Temporary	Not working	
英語力 Fluent	38.9%	35.2%	25.9%	100
Very Good	16.7%	29.2%	54.2%	100
Good	14.8%	41.0%	44.3%	100
Not Good	13.9%	37.5%	48.6%	100
None	6.5%	25.8%	67.7%	100
合計	19.0%	35.5%	45.5%	100

カイ二乗検定
を使って、英語
力と雇用形態と
の関係性につい
て分析したとこ

$P < .001$

ろ、0.1%水準で有意な結果が出た。

英語が流暢な層では、常勤が約38.9%となって英語力が高いほうが、安定した雇用についている。逆に、英語力が低くなると短期雇用や失業中などの不安定雇用状態が増加している。

4.4 生活満足度（Lisat-9）との関連性

生活満足度は表5に掲げる1)～9)の項目について、それぞれの回答にあわせて、大変不満足、不満足、やや不満足、やや満足、満足、大変満足の6レベルの回答を得た。最も満足度が高い大変満足を見ると、家庭生活(71.1%)、健康管理面(68.3%)、パートナーとの関係性(62.0%)の順に高い。他方、大変不満では、仕事(6.4%)、経済生活面(4.6%)、パートナーとの関係性(4.2%)となっている。

それぞれの回答をYesとNoの2つのカテゴリーに集約し、英語能力と生活満足度の各項目と英語力の関係についてピアソンのカイ二乗検定を使って見ると、生活全体については、5%水準で有意差が見られた。次に、「仕事について」と「家庭生活」については0.1%水準で有意な結果となった。これらの3項目以外は、統計学上英語能力との有意な関係が見られなかった。この結果から見ると、英語力との関係性では、仕事、及び経済生活上の満足度との関係性が有意に高く、英語力と雇用との関係をみた表4の結果と整合性がある。

表 5 生活満足度

設 問	大変 不満 %	不満 %	やや不 満 %	やや満 足 %	満足 %	大変 満足 %
1) 生活全体について n=231	2.1	0.8	2.6	6.9	37.6	49.7
2) 仕事について n=220	6.4	3.2	6.8	11.4	40.0	32.3
3) 経済生活面 n=218	4.6	3.2	10.6	33.5	32.6	15.6
4) 余暇生活 n=225	3.1	1.8	4.0	17.3	38.7	35.1
5) 社会関係性 n=232	1.3	2.2	3.0	8.2	38.8	46.6
6) 性的生活について n=188	3.2	2.1	1.1	8.5	38.3	46.8
7) 健康管理 n=230	0.9	0.4	0.4	3.0	27.0	68.3
8) 家庭生活について n=232	1.3	0	0.9	1.7	25.0	71.1
9) パートナーとの関係性について n=213	4.2	0.5	1.9	4.2	27.2	62.0

P<.001

表 6 生活満足度と英語力との関係の有意確率

設 問	有意確率
1) 生活全体について n=231	*
2) 仕事について n=220	*
3) 経済生活面 n=218	**
4) 余暇生活について n=225	n.s.
5) 社会関係性 n=232	n.s.
6) 性的生活について n=188	n.s.
7) 健康管理 n=230	n.s.
8) 家庭生活 n=232	n.s.
9) パートナーとの関係性 n=213	n.s.

P<.001=***, P<.05=**, P<.01=*

表 7 生活全体の満足度 (n=231)

	生活全体の満足度	
	No	Yes
英語力 Fluent	15.4%	23.9%
Very Good	15.4%	10.1%
Good	30.8%	25.7%
Not Good	30.8%	29.4%
None	7.7%	11.0%
合計	100.0%	100.0%

p<.05

表 8 経済的満足度

	経済的満足度	
	No	Yes
英語力 Fluent	30.0%	21.3%
Very Good	7.5%	11.8%
Good	30.0%	27.0%
Not Good	22.5%	29.8%
None	10.0%	10.1%
合計	100.0%	100.0%

p<.001

表7 英語力がFluent(流暢)では、「満足である」が23.9%となっているが、他の英語力ランクでは大きな差異が見られない。

表8 経済的満足度を見ると、流暢（Fluent）では、経済的満足していない層の割合のほうが高く、とてもよい（very good）、よい（good）、あまり話せない（not good）では、逆転している。

4.5 エンパワメント得点との関係性

表9は、エンパワメント指標について問うたものである。7) 選挙で投票している、8) 公共サービスを利用できている、9) 必要としたときに医療を受けることができる、10) 生活に必要な情報にアクセスできる、11) 自分が教育を受けることができる、15) 家族の絆がある、16) 友人がいる、17) 1人以上の信頼できる友人がいるの8項目は、「そう思う」と回答したもの

表9 エンパワメント指標

	そう思わない	あまりそう 思わない	まあそう思う	そう思う
1) 経済的に安定している	8.8	16.2	51.4	23.6
2) 有給の職についている	37.7	18.4	19.7	24.2
3) お金を借りることができる人がある	29.1	16.8	32.7	21.4
4) 貯蓄がある	33.2	18.0	30.4	18.4
5) 政治的に活動している	31.4	20.5	24.8	22.9
6) 自分自身の要求に対して行動することができる	50.9	5.0	11.9	31.6
7) 選挙で投票している	9.1	2.3	37.0	51.1
8) 公共サービスを利用できている	7.9	5.1	24.5	62.5
9) 必要としたときに医療を受けることができる	7.4	7.4	29.0	56.3
10) 生活に必要な情報にアクセスできる	3.1	6.2	35.1	55.6
11) 自分が教育を受けることができる	6.0	3.7	39.1	51.2
12) コミュニティのために奉仕活動をしている	10.0	7.7	38.9	43.0
13) 地域のグループに所属している	21.5	11.2	26.0	27.7
14) 教会や宗教のグループに所属している	22.3	10.0	22.3	45.5
15) 家族の絆がある	5.8	2.2	25.9	66.1
16) 友人がいる	2.3	4.5	25.3	67.9
17) 1人以上の信頼できる友人がいる	5.3	7.5	33.2	54.0

が50%を超えている。6) 自分自身の要求に対して行動することができるについては、「そう思わない」が50%を超えている。

対象者のエンパワメントの状況を明らかにするため、表11の17項目からなる指標について回答を求めた。これらの回答について、「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答したものを0点、「まあそう思う」「そう思う」とした回答を1点として、合計得点を表した結果、表10のような結果となっていた。得点が12～14点に約37%の回答者が集中している。

次に、エンパワメント指標と英語能力との関連性について検証する。エンパワメントの指標は、国連で女性の開発指標として使用しているものを用いた。

統計学上有意な結果となった項目は、経済的指標では、1) 経済的に安定している、2) 有給の職についている、4) 貯蓄が

表10 エンパワメント得点

得点	割合 (%)
0	2.9
1	0.4
2	1.2
3	2.1
4	0.4
5	2.1
6	2.9
7	3.3
8	4.1
9	9.1
10	5.8
11	8.7
12	12.0
13	12.0
14	12.8
15	9.1
16	5.4
17	5.8

出典 筆者 2017

表11 エンパワメント指標と英語力のカイ二乗検定

エンパワメント指標	有意確率
1) 経済的に安定している	***
2) 有給の職についている	**
3) お金を借りることができる人がいる	n.s.
4) 貯蓄がある	**
5) 政治的に活動している	*
6) 自らの要求のために行動する	**
7) 選挙で投票している	***
8) 公共サービスを利用できている	**
9) 必要としたときに医療を受けることができる	*
10) 生活に必要な情報にアクセスできる	**
11) 自分が教育を受けることができる	**
12) コミュニティのために奉仕活動をしている	n.s.
13) 地域のグループに所属している	***
14) 教会や宗教のグループに所属している	n.s.
15) 家族の絆がある	n.s.
16) 友人がいる	n.s.
17) 1人以上の信頼できる友人がいる	n.s.

p<.05=*, p<.01=**, p<.001=***, n.s.=有意差がない

あるの3指標であった。政治的指標では、5) 政治的に活動している、6) 自分自身の要求に対して行動することができる、7) 選挙で投票しているの3指標が有意となった。サービス・情報へのアクセスに関する項目では、8) 公共サービスを利用できる、9) 必要としたときに医療を受けることができる、10) 生活に必要な情報にアクセスできる、11) 自分が教育を受けることができるという4指標となっている。コミュニティ関係の指標では、13) 地域のグループに所属しているのみが有意な結果となっている。家族、友人といったプライベートな社会関係性、コミュニティにおける奉仕活動、教会や宗教グループへの所属といったコミュニティ関連項目も同様に、有意な関係がないとされた。これらの項目は、ヒスパニックコミュニティの中で英語力に関係なく構築できる関係性であるといえる。

経済的安定性は、肯定したものが162人と否定したものの約3倍となっている。英語力が流暢(Fluent)としたものは、経済的安定について肯定しているものが26.5%となっているが、これ以外には、英語力の違いによって肯定(Yes)したものと否定(No)したものでは大きな差が見られない。

表13を見ると、英語力がFluent(流暢)では、有給の職についているもの(Yes)が128件(43.0%)、そうでないもの(No)は、97件(56.0%)となっており、有給の職についているものは半分以下である。英語が流暢なものは、有給の職についているものの

表12 経済的安定

		経済的安定	
		NO (n=54)	YES (n=162)
英語力	Fluent	16.7%	26.5%
	Very Good	11.1%	11.1%
	Good	24.1%	27.2%
	Not Good	31.5%	29.0%
	None	16.7%	6.2%
合計		100%	100%

p<.001=***

表13 有給の職についている

		有給の職についている	
		NO (n=128)	YES (n=97)
英語力	Fluent	15.6%	33.0%
	Very Good	10.2%	10.3%
	Good	27.3%	25.8%
	Not Good	33.6%	21.6%
	None	13.3%	9.3%
合計		100%	100.0%

p<.01=**

割合が、英語力がこれより低いものと比較して高い。しかし、その他の英語レベルでは、有給の職についているかどうかはあまり変わらない。

表14では、Noが110、Yesが107と僅差でNoが多い。ピアソンのカイ二乗分析では、 $p = .009$ となつて、優意差が見られる。英語力がFluent（流暢）では、貯蓄があるが31.8%となっている。Not Goodより英語力が低い層では、貯蓄なしの回答が「ある」よりも高い割合を示している。

表14 貯蓄がある

		貯蓄がある	
		NO (n=110)	YES(n=107)
英語力	Fluent	16.4%	31.8%
	Very Good	10.9%	9.3%
	Good	21.8%	29.9%
	Not Good	35.5%	21.5%
	None	15.5%	7.5%
合計		100.0%	100.0%

$p < .01 = **$

表15は、政治的活動への参加についての問いであるが、ピアソンのカイ二乗分析により $p = .011$ となつて統計学的には、5 %水準で有意な結果となっている。英語力Fluent（流暢）では、貯蓄があるとしたものは28.2%であるが、英語力がGoodより低いものでは、政治的活動への参加をいていないものがしているものを上回る。

表15 政治的活動への参加

		政治的活動への参加	
		NO (n=24)	YES(n=196)
英語力	Fluent	20.4%	28.2%
	Very Good	7.4%	13.6%
	Good	30.6%	23.3%
	Not Good	28.7%	27.2%
	None	13.0%	7.8%
合計		100.0%	100.0%

$p < .05$

表16は自らの要求のために行動するかどうかを問うた質問であるが、ピアソンのカイ二乗分析により $p = .003$ となつて統計学的には、1 %水準で有意な結果となっている。Fluent（流暢）では、自らの要求のために行動するとしたもの

表16 自らの要求のために行動する

		自らの要求のために行動	
		NO (n=24)	YES(n=196)
英語力	Fluent	12.5%	25.5%
	Very Good	12.5%	10.7%
	Good	20.8%	27.0%
	Not Good	37.5%	27.0%
	None	16.7%	9.7%
合計		100.0%	100.0%

$p < .01$

は25.5%であるが、英語力がNot Goodより低いものでは、自らの要求のために行動しないものがするものを上回る。

表17は選挙についての設問であるが、英語力との関係性についてピアソンのカイ二乗分析により $p = .000$ となって統計学的には、0.1%水準で有意な結果となっている。Fluent（流暢）及びvery Good（とてもよい）では、選挙に行くとしたものが、行かないとしたものの割合を上回る。英語力がGood（よい）より低いものでは、選挙に行くとしたものの割合が、選挙に行かないとしたものの割合が、選挙に行くものの割合を上回る。

表17 選挙に行く

		選挙に行く	
		NO (n=123)	YES (n=94)
英語力	Fluent	13.8%	37.2%
	Very Good	4.1%	19.1%
	Good	26.8%	24.5%
	Not Good	39.0%	12.8%
	None	16.3%	6.4%
合計		100.0%	100.0%

$p < .001$

表18は、公共サービスのへのアクセスについての設問であるが英語力との関係性についてピアソンのカイ二乗分析により $p = .010$ となって統計学的には、1%水準で有意な結果となっている。公共サービスにアクセスできるとしたものの実数は188件、できないとし

表18 公共サービスへのアクセス

		公共サービス	
		NO (n=28)	YES (n=188)
英語力	Fluent	10.7%	25.0%
	Very Good	3.6%	11.7%
	Good	25.0%	27.1%
	Not Good	39.3%	27.1%
	None	21.4%	9.0%
合計		100.0%	100.0%

$p < .01$

たものは28件であった。英語力の水準が、Fluent（流暢）、Very Good（とてもよい）、及びGood（よい）では、「公共サービスにアクセスできる」としたものの割合が、「できない」としたものを上回っている。

表19は、必要に応じた医療へのアクセスができるかどうかを問う設問であるが、英語力との関係性について、ピアソンのカイ二乗分析を用いて分析すると、 $p = .016$ となって、5%水準で有意な結果となっている。必要に応じた医療へのアクセスを行うとしたものの実数は188人、行わないとした

ものは34人である。英語力との関係性では、Fluent（流暢）としたもののうち、必要に応じた医療へのアクセスを行うとした割合は、24.9%となっている。英語力がNot Good（あまり話せない）、No（全く話せない）としたものでは、医療サービスへのアクセスができない割合が高い。

表20は、生活情報へのアクセス情報について問うたものであるが、ピアソンのカイ二乗検定によって $p = .002$ となって 1 % 水準で統計学上有意な結果となった。生活除法へのアクセスができるとしたもののは、204件、できないとしたものは21件である。

英語力がFluent, Very Good, Good では、生活上へのアクセスが可能なものは、できないものに比べて多いが、英語力がNot Good, None としたものは、生活情報へのアクセスをしていないものの割合が高い。

表21は自らの教育を受ける可能性についての設問である。英語力との関係性についてピアソンのカイ二乗検定において、 $p = .004$ 、1 % 水準で有意な結果となっている。自らの教育の可能性があるとしたものは、194人、ないとしたものは21人であるが、英語力が

表19 必要に応じた医療へのアクセス

		必要に応じた医療へのアクセス	
		NO (n=34)	YES (n=197)
英語力	Fluent	11.8%	24.9%
	Very Good	11.8%	10.2%
	Good	14.7%	27.9%
	Not Good	35.3%	27.4%
	None	26.5%	9.6%
合計		100.0%	100.0%

p<.05

表20 生活情報へのアクセス

		生活情報へのアクセス	
		NO (n=21)	YES (n=204)
英語力	Fluent	9.5%	24.0%
	Very Good	9.5%	10.3%
	Good	0.0%	28.4%
	Not Good	42.9%	27.9%
	None	38.1%	9.3%
合計		100.0%	100.0%

p<.01

表21 自らの教育の可能性

		教育の可能性	
		NO (n=21)	YES(n=194)
英語力	Fluent	14.3%	25.3%
	Very Good	14.3%	9.8%
	Good	14.3%	28.9%
	Not Good	38.1%	26.3%
	None	19.0%	9.8%
合計		100.0%	100.0%

p<.01

(Fluent) 流暢、Good (よい)、Not Good (あまり話せない) としたものでそれぞれ25%を超えている。しかし、Not Goodでは、38.1%、Noneでは19.0%となっており、ある程度高い英語力があつたほうが教育の可能性は高いという結果が読み取れる。

表22は、ローカルグループへの参加についての設問である。英語力との関係性をピアソンのカイ二乗検定によってみると、 $p = 0.001$ となつて、0.1%水準で有意な結果となった。英語力が (Fluent) 流暢では、ローカルグループへの参加は29.2%となっている。Not

表22 ローカルグループへの参加

		ローカルグループへの参加	
		NO (n=79)	YES (n=130)
英語力	Fluent	17.7%	29.2%
	Very Good	13.9%	9.2%
	Good	24.1%	29.2%
	Not Good	30.4%	25.4%
	None	13.9%	6.9%
合計		100.0%	100.0%

$p < .001$

Good やNoneでは、参加しないとするものが、Not Goodで30.4%、Noneで13.9%となつてローカルグループへ参加しないとしたものの値が参加するとしたものより高くなっている。

4.6 英語力とエンパワメント指標

表11のエンパワメント指標について、肯定的回答に1点を付与して合計したものをエンパワメント得点とした。英語能力とエンパワメント得点の関係性を見るために分散分析を行った。この結果F値10.69、有意確率は $p = .0001$ となつて0.1%水準で有意である。

平均値、中央値、グループ中央値それぞれ、英語力が高いほど高得点となっており、英語力とエンパワメント得点は有意な関係性であるといえる。

4.7 エンパワメント指標の因子と英語力との関係性

表9のエンパワメント指標に対してNo, Mostly No, Mostly Yes, Yesの4件で回答を得た結果に対して、それぞれNo = 0点、Mostly No = 1点、Mostly Yes = 2点、Yes = 3点を与えて得点化した。この結果について平均

表23 英語能力とエンパワメント得点 (17項目)

英語力	平均値	度数	標準 偏差	中央値	グループ化 中央値	標準 平均値 の標準誤差	最小値	合計
Fluent	13.1111	54	3.19591	14.0000	13.6667	.43491	0.00	708.00
Very Good	13.8261	23	6.24247	13.0000	12.7500	1.30164	6.00	318.00
Good	12.1167	60	3.08134	12.5000	12.5000	.39780	0.00	727.00
Not Good	10.1549	71	4.19063	11.0000	10.8000	.49734	0.00	721.00
None	8.5161	31	4.45624	9.0000	9.1667	.80036	0.00	264.00
合計	11.4561	239	4.33633	12.0000	12.1379	.28049	0.00	2738.00

値及び標準偏差を算出して、天井効果、フロア効果についてみると、フロア効果はなかった。天井効果は、家族の絆、友人がいる、信頼できる友人 1 人以上に見られたが、そもそも対象者がエンパワメントの過程にある人々であることを考慮し、数値が高いことは当然の結果であるので、除外せずにそのまま因子分析することとする。

初回因子分析は、主因子法により、その結果は表24に示すとおりである。

表24 主因子法による初回の因子分析

因子	初期の固有値		
	合計	分散の %	累積 %
1	5.302	31.188	31.188
2	1.639	9.643	40.831
3	1.342	7.897	48.727
4	1.260	7.411	56.138
5	.992	5.834	61.971
6	.923	5.430	67.401
7	.765	4.503	71.904
8	.732	4.304	76.208
9	.674	3.965	80.173
10	.593	3.491	83.664
11	.552	3.246	86.910
12	.471	2.768	89.678
13	.451	2.652	92.330
14	.396	2.327	94.656
15	.371	2.184	96.840
16	.280	1.649	98.489
17	.257	1.511	100.000

因子のスクリープロットによると、第4と第5の因子間の傾きが下方に向いているため、4因子と決めて更に因子分析を行った。

次に主因子法4因子で、プロマックス回転によって分析すると、4つの下位尺度に分割された。「家族との関係性」は、第1因子と第4因子のダブルバインドとなったため除いた。また、「教育を受けることができる」は、第1因子と第2因子のダブルバインドであるため除外した。さらに主因子法プロマックス回転によって分析した表23に示すように4因子となっ

た。

表25 因子構造

クロンバック α は、第1因子では、.715、第2因子.658、第3因子.653、第4因子.740となっている。エンパワメントの因子は4つに分割され、第1因子はアクセシビリティ因子、第2因子は経済性因子、第3因子は社会活動因子、第4は社会関係性因子と命名した。これらの因子の合計点を算出し、それぞれ下位尺度得点を算出した。

	因子			
	1	2	3	4
公共サービスへのアクセス	.820	.013	-.092	-.029
生活情報へのアクセス	.757	.089	.060	-.014
必要に応じた医療	.536	.061	.289	-.024
自らの要求のための活動	.451	-.151	-.005	.254
借金ができる	.099	.832	-.290	-.076
貯蓄あり	-.083	.620	.123	-.016
有給職あり	-.005	.471	.014	.020
経済的安定	-.041	.410	.089	.243
ローカルグループへの参加	-.052	.164	.637	.051
教会に所属している	-.086	-.128	.615	.032
コミュニティへのボランティア	.166	.033	.525	.058
選挙に行く	.157	-.185	.439	-.200
政治的活動に参加	.016	.141	.375	.026
友人がいる	.114	-.067	-.141	.959
信頼できる友人がいる	-.097	.094	.144	.536

英語力はFluent 5点、Very good 4点、Good 3点、Not good 2点、None 1点と得点化し、英語得点と命名した。英語得点とエンパワメント因子の関係性を見るために、重回帰分析を行う。

回帰式全体の有意性の検定は、0.1%水準で有意である。英語力得点とアクセシビリティ因子には、相関性があり、0.1%水準で有意である。英語得点と経済性は、5%水準で有意な結果であり、正の相関がある。英語得点と社会活動は、0.1%水準で有意であり、弱い正の相関がある。社会関係性とは相関性が見られなかった。

5. 結論

英語力の習得は、年齢と居住年数に関連する。居住年数は長いほど、流暢に話すことができる力が獲得されている。

移民にとって重要な生活力の向上には、雇用は重要な要素であるが、英語

表26 英語力得点とエンパワメントの関係性

	英語力 得点	アクセシ ビリティ	経済性	社会活動	社会 関係性
Pearson の相関					
英語力得点	1.000	.336	.175	.290	-.051
アクセシビリティ	.336	1.000	.356	.518	.340
経済性	.175	.356	1.000	.314	.304
社会活動	.290	.518	.314	1.000	.333
社会関係	-.051	.340	.304	.333	1.000
有意確率 (片側)					
英語力得点		.000	.017	.000	.269
アクセシビリティ	.000		.000	.000	.000
経済性	.017	.000		.000	.000
社会活動	.000	.000	.000		.000
社会関係	.269	.000	.000	.000	

力が高いほうが安定した雇用につくことができている。逆に、英語力が低い場合は、英語力が高い場合と比較して、短期雇用や不安定就労の状態が増加する。

ヒスパニック系移民女性の自身の生活満足度との関係では、生活全体に関する満足度、仕事に関する満足度、経済生活面での満足度と英語能力の有意な関係性が認められたが、他の項目では関係性がなかった。

エンパワメント指標17項目を因子分析によって得た4つの因子、社会サービスへのアクセシビリティを示す「アクセシビリティ因子」、借入れや、貯蓄の有無などを示す「経済性因子」、教会やコミュニティへの参加を示す「社会活動因子」、信頼できる友人や、友人の有無をからなる「社会関係性因子」との関係性を見ると、「社会関係性」と英語力との関係は有意ではなかった。最も有意差が現れたのは、「経済的因子」であり、これは、この研究の中で一貫している。

つまり、仕事に就く、安定的に雇用される、経済的に安定した生活を送るという移民の女性の生活における経済的な基盤は、英語力によって関連付けられている。

生活安定のための要素は、「流暢な」英語力と関連しており、「流暢な」英語の習得のためには、長期の居住期間すなわち、アメリカに子どものころか

ら暮らしていることが必要であり、多くの第一世代の移民が経済面での安定を得ることが難しいことと一致している。移民女性が経済的に安定した生活を獲得するためには、英語力の習得は大きなステップになると考えられる。

本研究はJSPS科研費基盤研究C26380763の助成を受けたものです。

文献

Felisia Gonzales (Pew Hispanic Center). (2008). *Hispanic Women in the United States, 2007*. Pew Hispanic Center.

KaoTurney & GraceKristin. (Volume 102, 2009 - Issue 4). Barriers to School Involvement: Are Immigrant Parents Disadvantaged? The Journal of Educational Research, 257-271.

Tienda, H. S. (1992). Family, Work and Women: The Labor Supply of Hispanic Immigrant Wives. *International Migration Review Vol. 26, No. 4 (Winter, 1992)*, 1291-1313.

有賀貞. (1995). 『エスニック状況の現在』. 財団法人 日本国際問題研究所.
仁科伸子 (2017), ローガンスクエア近隣地域における移民女性のエンパワメント調査第一次集計結果, 『社会関係研究 第23巻第1号』, 熊本学園大学社会関係学会

A Study on the Effect of English Language Skill to the Empowerment in the Neighborhood life of Immigrants Women in Chicago

Nobuko Nishina

The purpose of this research is to statistically analyze and empirically clarify the language acquisition influences on Hispanic immigrant women in Chicago. It is taken place in Logan square neighborhood.

This research clarified the following.

Employment is an important factor for improving language capacity for immigrants, moreover higher English proficiency leads more stable employment. On the contrary, in the case of low English ability, the state of short-term employment and unstable employment will increase compared with the case higher English ability.

English ability significantly relates to satisfaction with respect to the whole life, satisfaction with work, in economic life, but not relevant in the other items.

Seventeen empowerment factor items are multivariate analyzed by SPSS into four factors. They are clarified following. “Accessibility factor” shows accessibility to social and public services. “Economic factor” shows the presence of savings or browning money, “social activity” shows participation in church and community. The relation between “social relationship” and English ability was not significant. “Factor”, reliable friends and “social relationship factor” consisting of the presence or absence of friends. The most significant difference appeared is “economic factor”, which is consistent in this study. In other words, the economic foundation, steadily employment, economic stability are relevant to English ability.

Many factors are related to “fluent” English ability, and for acquiring “fluent” English, it is necessary to live in the United States for a long term residence or living in America as a child. It is consistent with the difficulties of many first generation immigrants getting economic stability.

In addition, acquisition of English ability is considered to be a major step for immigrant women to obtain economically stable lives.